



## 樋口 敦子

HIGUCHI Atsuko

大日本住友製薬  
執行役員

# 世界の潮流に 乗り遅れぬよう、 「やってみよう」の精神で



最近の関心事は、やはり新型コロナウイルスワクチンとして広く知られこととなったmRNA（メッセンジャーRNA）ワクチンですね。猛スピードで実用化されたこのワクチンには新技術が使われており、コロナ禍という特殊な状況下とはいえ、これほど早く承認されたのは画期的なことです。残念ながら弊社による開発ではありませんが、製薬業界に身を置く者として、大きな出来事であると感じています。これを機に、mRNAを用いた技術がワクチン以外のさまざまな医薬品にも応用されていくでしょう。感染症と闘ってきた人類の歴史においても特筆すべき事柄であったと思っています。

このように新たな可能性を感じられるトピックがある反面、日本の製薬メーカーを取り巻く環境には厳しいものがあります。世界の製薬市場の比率を国別に見ると、1位の米国が半分近くを占めており、日本は2位の中国に続く3位となっています。少子高齢化が進む日本では、医療が必要な高齢者が増えていることから社会保障給付費も増えており、その抑制策の一つとして薬価の引き下げが行われています。新薬の開発には多額の開発費がかかるため、日本をベースとする新薬メーカーは、日本市場を大切にしつつも、十分な開発費を確保するために大きな市場である米国でビジネスを行わなければ生き残っていけない状況です。

一方で、希望を持てるムーブメントもあります。それは、規模が小さな創薬系バイオベンチャーでイノベーションが活発に起こっていることです。製薬業界でも、自社開発にこだわることなく、ベンチャー企業と手を組んだりM&Aを

したりすることで、外部から良いものを取り入れ、共にやっていこうという動きが盛んです。また、大学や研究所などアカデミアと共同研究を行う産学連携による成果も始めており、オープンイノベーションが研究開発において重要な位置を占めるようになってきていると感じます。

弊社では「精神神経領域」「がん領域」「再生・細胞医薬分野」を「研究重点領域」と位置づけており、なかでも従来強みしてきた「精神神経領域」で実績を上げています。この理由としては、やる気のある若手研究員が自由闊達に研究することができ、上司やシニアがそれをサポートするような仕組みがうまく機能しているところが大きいと考えています。

また、昨今DX（デジタルトランスフォーメーション）にまつわる議論が盛んですが、医療・製薬業界でもビッグデータ、すなわち電子カルテ・電子レセプトの情報や健診データなど、膨大なデータが注目されています。欧米では、新薬開発の大規模臨床試験に代わるものとしてすでに活用が始まっています。日本でもデータ基盤構築に向けた研究が進められ、実用化への期待が高まっています。

私は大阪府枚方市の出身で、大学院まで関西で過ごしました。関西に暮らす人には、ほかの人との間に垣根を作らず、自分の限界を決めずにやってみる、いわゆる関西人気質があると思っています。この関西人気質を遠慮なく発揮し、「やってみよう!」の精神で行動していけば、関西は地盤沈下から浮上することができ、日本全体の活性化にもつながるのではないかと期待しています。

(談)